

尊厳・理論と実践の融合

発表の目的

利用者（現場）と関わっていく中で、尊厳を意識し理論に基づいて行動することで、利用者の変化をみられることからの学びを発表する。

尊厳とは個人の存在や価値を尊重し、人間らしさを保ちつつ、自分らしい生き方をできるようにすることを指す。人間には自己決定や自己表現、自己実現などを行う権利があり、その権利を尊重し、守ることが尊厳を守ることにつながる。また、“聖なるもの”の経験の中で実感する「かけがえのなさ」、「他者の存在の大切さ」、「他者への責任＝倫理」といった、世俗の価値とは質的に違う価値のことである

模擬事例①ターミナルケア

利用者情報

Aさん（90歳代 女性）

要介護5

入居3年（夫20年前に死別 キーパーソンは長男）

ADL 寝たきり・全介助

現状

- ・一日をベッド上で過ごされる
- ・常に傾眠状態で、とろみ・ミキサー食を口に運んでも溜め込み、嚥下できず、食事を全く摂取されない

具体的な対応

- ・皮膚の湿潤対策やこまめな体位交換、クッションなどの福祉用具を活用したポジショニングなどを行うことで、褥瘡や拘縮を予防する
- ・飲み込み易く利用者が好む味のゼリー、ヨーグルト、ジュースなどを提供する
- ・返事がかえってこなくても穏やかに声かけをする など

実習を経ての考察

心身ともに安心・安楽に過ごしてもらうため、またその人が持つらしさや尊厳を尊重するためにも、利用者の生活歴から何に拘り何を楽しみにされ、何に悩まされ、何に重きを置いて生活されてきたのかを掴む必要がある。また、終末期に入られる前に、ご本人やご家族と「どのような最期を迎えたいか」ということについて話すことが大切だと感じた。

模擬事例②社会的孤立

利用者情報

Bさん（女性 80歳代）

要支援・要介護の申請していない

独居（夫死去 息子夫婦海外在住）

現状

- ・家族とは数か月に1度しか電話しておらず疎遠である
- ・地域の高齢化が進んでいる。また、近所にBさんと会話できる人がいない
- ・高齢による体力の低下に伴って家事がままならず、体調の悪化や家のごみ袋まみれになっているなどの問題がある
- ・本人が福祉の利用を恥だと思っており、支援を拒否している

具体的な対策

- ・自宅訪問を行い、「家をきれいにしたり、ほかの方との会話をしたりすることで、元気になっていくこともありますよ。」などの声掛けを行うことで、利用者自身が支援の必要性を理解してもらい、支援に対して好意的に思ってもらう

結論

- ・利用者の環境によってサービスの提供も変わっていく
- ・利用者本人が望んでいることを受け止めたうえで、支援をする
- ・講義で学んだことが現場で多くみられた
- ・講義で学んだことを理解し実習に臨むと利用者を理解しやすい

謝辞

実習先の先生方、私達の実習を受け入れてくださり、本当にありがとうございました。